

茶の湯文化学会会報 No.54

第54号 / 2007年 8月1日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

会長就任ご挨拶

谷 晃

一般池坊短期大学の「こころホール」で行われた茶の湯文化学会平成十九年度総会において、不肖このわたくしが会長に選出、承認されました。

前々会長の中村昌生先生、前会長の倉澤行洋先生に比し、文字通り浅学非才の身でありながら、このような大役をお受けすることにはいささか躊躇するものがありました。諸般の事情をかんがみ、謹んでお受けすることと致しました。

中村先生には七年余、倉澤先生には六年の間、当学会会長としてご尽力をたまわり、お蔭様で、学会の基盤をしっかりと築いたものとしていただきました。わたくしは両先生が敷いていただいたレールの上を、任期中とどこおりなく歩んで行くことが、まず第一の責務と認識しております。ただ学会の将来を考えると、一二気がかりな点が残されているのも事実です。

そのひとつはこのままでいけば、近い将来財政危機に陥るのではないかと不安があります。発足当初は学会員数が九百人を超えていたのが、最近では七百人前後となっており、しかも漸減傾向が続いています。さらに経常収支は毎年赤字となっており、いづれ留保している剰余金が底をつくことが予想されます。

その対応策としては、収入を増やすか、支出を減らすか、あるいはその両方を計るかですが、いたずらに支出削減を考えるだけでは、学会活動も不活発となり、「角を矯めて牛を殺す」結果になってしまつては、中村・倉澤両先生に対しても、また会員の皆さんに対しても申し訳ないことの上はありませぬ。

もちろん冗費を廃し節約できるところは節約すべきではありませんが、まださし迫った状況には至っていない現在は、収入を増やす、つまり会員数の増大を目指すたいと考えています。もちろんどのようなすれば会員数を増大させることができるのか、なかなか難しいものがあります。役員や理事、そして会員の皆さんの協力を得ながら、具体的な取り組みをしていきたく考えておりますので、なにとぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

またいまひとつの問題としては、この学会はもともと寄り合い所帯的な性格があり、現在までは両先生の手腕でうまくまとまってきましたが、将来的にはその問題が顕在化する可能性がなきにしもあらずです。

「茶の湯文化学会」という名称が示す通り、当学会は茶の湯を核として会員が集まっているわけですが、通

常は学会といえは研究者を中心とした集まりであるのに対して、この学会には研究者だけでなく、いわゆる茶の湯の「実践者」つまり、茶の湯を学んだり教えたりしておられる方も数多く会員となっておられます。そのため純粋に学問的な集まりを目指せば、実践者の方の不満がこうじゃかねえせんし、また実践者の方の希望に添うような活動内容とすれば、今度は研究者からの反発を招くおそれもあります。

また茶の湯はたいへんに広範な内容を含むため、歴史・美術史・文学などよりも、医学・生理学・農学などの自然科学系の学問分野とも関わりをもちます。そのため各専門分野から参加している方たちは、どうしても属する学問分野の方法論で茶の湯を見たり、考えたりしがちになります。その結果相互理解が不足し、学会として期待する成果をあげるのがむずかしいという問題も生じます。

従来は茶の湯研究といえは、茶の湯の世界だけに閉じこもりがちであったのが、当学会が発足し、関連分野との相互理解を掲げてそれなりの成果をあげてきたのですが、今後さらに当初の目的を完遂しようとするれば、これまで以上に困難な状況に直面することが予想

されます。

しかしながら困難が予想されるからといって再び茶の湯の世界のみに閉じこもってしまうことは、両先生がこれまで築いてこられたものを無にすることにもなりかねません。また学会の在り方としても賢明なこととは申せません。今後具体的にどのようにすればいいのかについては、十分に議論を重ねたうえで学会の活動を進めていく必要があります。そのためにも広く学会員の皆さんからもご意見をお聞かせくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

以上、ご挨拶をかねて、新会長として思うところを述べてみました。

理事 会

平成十九年度第二回理事会が、六月三十日（土）午後二時から池坊短期大学で開催された。幹事も出席する拡大理事会であった。

最初に、谷会長より、理事役割分担の確認があり、各役割の代表者の確認とその役割の内容が説明された。

つづいて平成十九・二十年度の事業計画概要について各役割の代表理事より提案があつ

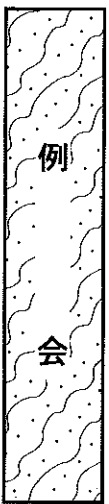
た。まず会誌について日向理事より、次号（第十四号）を年内に発行できるよう努力中であること、過去のシンポジウムで未公表の内容を掲載したいこと、など説明があつた。次に

会報については池田理事より、既刊五十三号の発刊時期が少し遅れたので、次号で例年通りに戻すよう努力する、例会の発表概要で未掲載のものをできるだけ多く掲載する予定である、とのことであつた。大会と研究会については高橋副会長より説明があり、二十年度大会の日程と場所についての検討は次回東京例会（七月七日）終了後に行なう予定であること、研究会は九月二十一日〜二十五日の日程で計画（中国）であることなどが提案された。それとともに今年度も一回の研究会の計画については、影山副会長が、十二月から二月頃の時期で検討することとなった。例会については、各地区の担当者から実施状況と今後の予定が報告された。

役員選出方法についての議論も行なわれ、選挙による選出を念頭に、その具体的な検討のための素案を、影山副会長が次回理事会までに作成することになった。

その他、永吉理事から、高知例会の組織を支部として認めて欲しいとの要望が出され、

これに対し谷会長は、各地区例会との兼ね合いを考えねばならないが、できるだけ早い時期に要望に応えられるよう考えていきたいとした。



東京例会

（平成十八年七月八日）

「将軍家・大名家の道具管理」

矢野 環

①茶道具の購入・管理・運用
足利将軍家では、会計管理は武家が当るとしても、道具類は同朋衆が一括して管理していた。公方御蔵からの出し入れも行い、座敷荘殿を行った。信長の場合、官僚松井有閑は道具買入れと管理に関わり、茶堂を勤めたこともある。楠長譜は管理に関わっていたと思われる。一方で、今井宗久、千宗易、津田宗及等の茶堂が居て、道具に関して進言していた。

徳川幕府の初期には、座敷荘殿の同朋衆と茶堂は別組織で管理された。その道具は土用虫干に台帳と照合され、江戸後期には略図付きの台帳までができる。家光親政となった寛

永九年には、上級茶道具は四つの長持ちに整理され、家康・秀忠伝来の肩衝等を一番長持ちに、下賜に用い得る茶人を二番長持にという、序列的整理がされていた。

寛永二十一年（一六四四）、松平伊豆守信綱は御物御茶道具の台帳「寛永二十一年御物帳」を作成した。同様に家光の歿する前年慶安三年（一六五〇）にも、長持別台帳『御物御道具覚』が残され、家光期の道具集積の基準史料である。これらの台帳の段階では五つの長持に整理されていた。この中間の正保三年（一六四六）には、長持別台帳形式ではなく、諸家名物記とともに若干の御物を補充した品種別の名物記「正保三年名物記」が成立していた。それが民間に流れたものが『玩貨名物記』である。また江戸後期の虫干台帳が民間で『柳営御物帳』と呼ばれる。

②藤重家

大坂城落城の後、藤重藤元・藤殿父子は焼け跡から茶入を拾い出して修復し、その見事に感激した家康は松本・つくも茄子を下賜した。藤重家はその後幕府の虫干にも立ち会っている。また蜂須賀家や秋田家などの大名家の茶器管理に関わった。唐物屋との売買や著名な鑑定人に依頼することもあつたが、日常

的には藤重の職掌であつた。

③道具商のネットワーク

『名物記三冊物』が道具商によって作り広められたように、道具商の情報管理は優れたものであつた。丸屋文琳は道具帳類に姿を留めておらず、今では白玉文琳（根津）と同じかとされる。近代の記録だが丸屋文琳の図がある。道具商による実見図の転写である。元禄以降の「道具商の時代」が「博物館の時代」に変遷しつつある現在、道具商の伝統が保持されることを望む。

「民藝運動と茶道」

鈴木禎宏

宗教哲学者・柳宗悦（一八八九〜一九六一）はその晩年、在来の茶道を批判し、自らが創立した日本民藝館において独特の茶会を開いたことで知られる。日本民藝館で開催された第一回茶会（昭和三十年十二月五日）を主たる題材として、昭和三十年前後の民藝運動と茶道の関係を、柳宗悦、民藝運動、当時の社会状況という三つの視点から考察する。

まず柳宗悦から見た場合、茶道への言及と関与は、思想運動としての民藝運動を完成させるものであつた。戦後、柳は「民藝」とい

う主張を、仏教的語彙を用いつつ「渋い」という言葉に集約・換言するという作業を通して、民藝思想を村田珠光、武野紹鷗以来の茶道史と接続させ、日本文化史上で位置づけた。また「渋い」という日本独特の美意識を、偏狭なナショナリズムに陥ることなく、外に開かれた形で海外に向けて発信した。

民藝運動史において茶会を考えた場合、これには人と人、あるいは人と物を結び付け、運動を活性化する役割があった。茶会は「用と美」の主張のもと、道具の由緒・来歴、銘、格を否定(リセット)するという独特の道具組がなされた点で、参加者の美意識研磨と、運動史の生成・継承、そして世代交代を促すものであった。またこの茶会は美術館という視覚優位の装置(ハード)の中で、新しい時代に適した生活様式(ソフト)を模索・提唱するという、モデルルームの実験の要素も認められる。

昭和三十年頃という歴史的背景は、神武景気と共に戦後復興が一応成し遂げられ、「もはや戦後ではない」という言葉が現れた。こうした活気のもと、オブジェ、美術工芸、クラフト、工業デザインといった造形分野が分化を見せ、作家団体の設立も活発であった。

に対し「家庭寮」という名称の、茶道などの講習の場を設けた。それは世間から花嫁学校と呼ばれた。また外地の京城第一公立高等学校などの卒業生は、「清和女塾」という茶道を教える私塾に通う者があった。

四、キリスト教系女学校において茶道が取り入れられる場合、日本に迎合する姿勢を示すものと捉えられる。

五、女学校で教えられた「作法」は、小笠原清務による礼法教授を基礎として学校の教科として考え出されたものであり、本来茶道とは異なるものであった。

以上、今後もさらに検討を重ねたい。

「小石元瑞筆煎茶会記」「福嶋元輔追福茶宴之記」について

松阪富美子

天保八年(一八三五)十一月十日、福島元輔の追福を目的とし、京都の浦上春琴宅にて煎茶会が開かれた。小石元瑞・浦上春琴・山本梅逸・俣野嶮谷・小関篤の五名が各々席を設け、本記は元瑞の担当席の煎茶会記である。成立は天保十二年閏正月十七日。

福島元輔は、京都の医家小石元瑞の門人。本会記の特徴を挙げると、

さらに、文化財保護法の改正によって、国家は物作り現場への関与を深めた。「伝統工芸」の分野では荒川豊蔵ら、「桃山復興」と呼ばれる人々の活動が顕著であった。こうした状況下、民藝運動は徐々に活動範囲を限定され、他勢力との競合・棲み分けを図る必要に迫られていたと思われる。

近畿例会

(平成十九年七月七日)

「茶道と礼法——女学校にみるその相関——」

小林善帆

男性がするものであった茶道(茶の湯)が、なぜ女性がするものとなったのか。この問いかけに対し今日考えられている理由は、明治期に入り積極的に女子の学校教育の現場で茶道が取り入れられたからとされる。しかし本当に女学校で積極的な茶道の取り入れは見出せるのであろうか。また、女学校における茶道は作法、という捉え方は射たものなのであろうか。

研究史において、明治初期の女学校における茶道は跡見女学校を事例に語られるが、同校に関して研究され尽くしたとは言いがたい。さらにこれまで、最初に検討されるべきであ

一、原本は究理堂文庫(京都)に所蔵されており、現在確認できる煎茶会記として最初期のものである。
二、席主は頼山陽・田能村竹田の友人として知られる小石元瑞。場所は浦上春琴宅。参加者には山本梅逸の名も見え、近世後期の代表的煎茶人が関係している。
別に梅逸・春琴・元輔・嶮谷・元瑞ら関係者が参加した品茶会の会記が遺されている(年不詳「仲冬念八夜用拙居茶集」『品茶記』上)。
したがって彼らの間には日頃から煎茶を介した交流があったと考えられる。

三、図はないが、それに代わる当日全体の次第および煎茶席についての説明がある。使用された煎茶具のほか、室内での人と物の位置や動き、喫茶にかかわる手順などが記されている。
四、当日使用の煎茶具は中国趣味の傾向にあり、そのほとんどが元瑞の煎茶具目録『茶具厨並平生心賞架品目』に当該名を見ることが出来る。内、数点は究理堂文庫所蔵として現存する。

中でも幅陳曾則画「蘭竹水石図」(現在は静嘉堂文庫美術館蔵)は、当時評価が高く、著名な文人八人の箱書・跋文が附されている。

る、国の女子教育の模範として存在した官立東京女子高等師範学校附属高等女学校が全く検討されていない。また当時の教育のありようも踏まえられてこなかった。これらのことから本報告は主に以下について述べた。

一、一八七五(明治八)年開校当初より茶道を取り入れた跡見女学校では、茶道は学科目とはいうものの、随意ないしは学課外に教えられるものであった。さらに一九〇一(明治三十四)年寄宿生対象のものとなるとともに、一九〇三(明治三十六)年以降、学課外に娯楽としても置かれた。

二、東京女子高等師範学校附属高等女学校の検討から、文教刷新の機運が高まった一八八〇(明治十三)年を境として学校教育が日本固有の文化と結びつくとともに、女子特有の学科目を設置する方向に進み始め、一八八二(明治十五)年から四年間のみ、学科目「礼節」の一部にいわば「遊芸」として茶道などが取り入れられたが、以後は学課外にも取り入れは見出せない。その後一九三六(昭和十一)年から校友会技芸部(今日でいえば部活動)で精神修養を目的に、表千家茶道が教えられたことが見出されるのみである。

三、公立女学校同窓会は昭和初期、卒業生

後に奥蘭田から岩崎家の所有となり、明治・大正の主要な煎茶会に掛けられた。
本会記は、茗讌図録刊行以前の煎茶の実態を伝える資料として極めて貴重であるといえよう。

東海例会

(平成十九年四月二十日)

「森川如春庵と森川コレクション」

長谷川芳孝

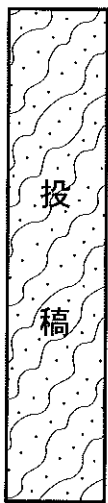
如春庵は高橋箒庵に「尾州屈指の好事家」と評され、十代で光悦茶碗「時雨」「乙御前」を掌中収め、「世の凡百の茶人の道具の中で嶄然頭角をぬきんでている」と言わしめた。特に鈍翁や三溪の信頼は厚く、佐竹本三十六歌仙分断の際にも、田中親美と共に三十二歳の若さで評価委員に推挙されるなど特筆すべき活躍をしているが、一般的には光悦茶碗の所持者としてその名が知られている程度である。

『東都茶会記』の記載回数からも如春庵は「自会五、他会六」で、全体で十三番目、東都在住以外では最多で、自会は五番目に多い登場回数であるが、近代文化史からも茶道史からも忘れ去られているのが実情である。

森川コレクションは、昭和四十二、三年に如春庵の所蔵品一八八件が名古屋城天守閣に寄贈されたが、名古屋市との行き違いから門外不出の条項が付帯され、貸出しはおろか写真撮影・掲載も出来ず幻のコレクションと言われ存在すら忘れ去られようとしていた。

しかし今回、名古屋市と森川家の遺族が話し合う仲介役の機会を得、名古屋市博物館に移管することを条件に門外不出の条項が撤廃され、四十年振りにその呪縛から解放されることになった。

来年三月「如春庵展」が名古屋市博で、一月には大阪歴博で「平瀬露香展」が開催されると聞く。これを機会に如春庵や東都在住以外の教養者達を今少し再評価すべき時期に来ているのではないだろうか。



「またも、明智光秀」

岩田澄子

豊臣秀吉の茶室として活躍した千利休の功績については語るまでもないが、近年は、秀吉が茶人として注目されている。平成十四年に矢部良明氏が『茶人豊臣秀吉』を出版され、

平成十八年度茶の湯文化学会大会におけるシンポジウムのテーマは、秀吉が主催した「北野大茶湯」であった。しかし、私の関心事の前に現れるのは、利休でも秀吉でもない。別に呼んだ覚えはないのに、なぜか明智光秀が出てくる。

一度目の登場は、「元禄時代以前で、二つの茶入（濃茶を入れる陶製の小壺で、棗ではないもの）を使用した濃茶二種点（こいちやにしゅだて）」を調べた時である。管見でその点前が確認できたのは、『天王寺屋会記（他會記）』天正十年正月七日の明智光秀会のみであった。台子（だいす）で、使用された茶入は肩衝と大海である（『松屋会記』、『天王寺屋会記』、小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』、八尾嘉男「片桐石州自会記」『茶の湯文化学第九号』参照）。

ちなみに、濃茶二種点の代表的なものに茶通（さつう）箱を使う点前があるが、諸流で秘伝として伝承されている茶通は多くの場合、二つの茶入ではなく、棗と茶入を使用する。近衛家熙「槐記」や藪内竹心「源流茶話」などでは、「茶通は、一つは茶入、一つは棗」という、『利休百会記』にみられる手法が論じられているし、『天王寺屋会記（自会記）』

でも九回以上の記録が散見された。なお、遠州流に現在伝承されている茶通では、二つの茶入を使用するようだが、前掲の四百会に及ぶ遠州の茶会記では確認できなかった（茶通の時、一つは棗だった）。

『南方録』の成立に関連して探していた濃茶二種点は、茶通ではなく、台子による濃茶二種点の記録だったので、光秀会は貴重な一例であった。

二度目は、いわば生（ライブ）の記録である『松屋会記』と『天王寺屋会記』から、天目茶碗の突飛な用法を抽出していた時である（拙稿「十六世紀の茶会記にみる天目茶碗の状況」『茶の湯文化学十三号』）。天目茶碗の中に茶入を入れた記録は、明智光秀が初めてあった。『天王寺屋会記（他會記）』天正七年一月七日、光秀が「肩衝を霜夜の天目の内に入れて」点前をしたという。天正十八年九月二十三日、秀吉が席主の会で、利休が「鴨肩衝を紹鴎天目の内へ御入」して点前をしたことはよく知られているが、光秀の方が十年以上先んじていたといえる。

三度目は、天目茶碗の「天目」という名称の由来について考えていた時である。長い話なので結論だけを先に言うと、「後世、天目

の由来がわかりにくくなった原因の一つは、明智光秀にある」ということになった。この、「風が吹けば桶屋がもうかる」のような話は、次のように進展していった。

ある日、円覚寺塔頭の備品記録である「仏日庵公物目録」の中に、虚堂や無準と並んで、「天目」の墨蹟や画賛があることに気づいた。そしてそれをきっかけに、「天目」の由来を語るには、元時代に活躍した中峰明本という禅僧の存在の考察が欠かせないと考えるようになった。この時、禅宗の理解が一番の課題であった。しかし、野口善敬氏が博士号の学位請求論文である『元代禅宗史研究』を前年に出版されたばかりという幸運に恵まれ、心強い教科書を参考に、茶の湯文化学会第二十三回研究会（平成十八年九月、於：浙江省寧波大学）で発表させていただいた。

発表の一ヶ月前、兵庫県丹波市青垣にある高源寺をお訪ねした。徳川美術館の佐藤豊三氏が「天目と茶」『天目』で言及されているように、日本僧として最も早く天目山に上り、中峰明本の法統を伝えた人物は遠溪祖雄である。祖雄が開山した高源寺は、嘉暦元年（一二二六）に後醍醐天皇から寺号を授かり、後柏原天皇には勅願寺として末代紫衣の宣旨を

下付されている。苔むした石段を上ると、境内は、祖雄が天目山から種を持ち帰ったという天目楓で埋め尽くされていた。

緑の風がそよぐ中、住職の山本祖登氏より数々の貴重なご教示を賜った。たとえば、数年前に丹羽慈祥老師と中国の天目山に上られた時の話では、文化大革命の爪跡に愕然とされたそうである。現地で歴史書が配布されているが、寺から僧侶が追い出され、仏教資料がごとごとく焼却された後に書かれた天目山の歴史は、信頼以前の水準にあるという。「高度な文化を持ち、日本の見知らぬ修行僧を快く迎え入れて教育してくれるという、懐の深さを持った中国。その敬愛する国で、文化大革命という取り返しのつかない暴挙が行なわれ、現在のような状況になったことが残念でならない」と話された。

帰宅後、高源寺のパンフレット等を見ていて気になることがあった。中峰の法系は幻住派と呼ばれ、日本の中世禅宗史に大きな影響を与えた。高源寺の回りには数百の末寺があり、最盛期にはその数が千ほどあったという。ところが、天正年間（一五七三―一五九二）、織田信長による丹波攻略により、高源寺とその末寺はことごとく焼き尽くされた。堂宇まで

焼失した高源寺が再建されたのは、享保年間（一七一六―一七三六）以降のことである。多くの末寺はその地を離れ、禅宗他派として生き延びる結果となった。

丹波攻略がなければ、天目楓がある高源寺や、天目山に初めて上った遠溪祖雄のことが、より広く知られやすい状況だったのではないか。「天目」の由来も、わかりやすかったのではないか。そんな思いが頭をよぎる。信長の命を受けて、丹波攻略をした実行犯は……、「明智光秀様。また、貴方でしたか。」（終）

例会の案内

東京例会（会場 東京芸術大学 午後二時）

日時：九月二十九日（土）

演題：「服部山楓とその師・式守蝸牛について」 宇野千代子氏

演題：「日本滞在茶道調査報告」 クリスティ・スラーク氏

日時：十二月一日（土）

演題：「薩摩茶入について」 松村真希子氏

演題：「屠本の『茗笈』について」

高橋忠彦氏

近畿例会（会場 池坊短期大学 第一会議室
午後二時～）

日時：十二月一日（土）

演題：「近世後期の本願寺御用商人にみる
”芸能”の姿―猪上七郎右衛門の能
と茶道―」
井上秀二氏

演題：「杉民治の茶の湯論」 影山純夫氏

東海例会（会場 名古屋文化短期大学 午後
六時～）

日時：九月二十八日（金）

演題：「名物裂について」（仮題）

吉岡明美氏

演題：「中国茶を楽しむ」（仮題）

山本経天氏

日時：十一月三十日（金）

演題：「楽茶碗の桃山と今

―長次郎と光悦と当代吉左衛門―

林屋晴三氏

演題：「山田宗徧について」

山田宗徧氏

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室
午前十時～）

日時：九月十六日（日）

演題：「尾戸焼考証」

日時：十二月二日（日）

演題：「平面図でみた茶室構造並びに茶事」

第二十四回研究会のお申込み

すでに皆様のお手元にご案内のパンフレットが届いていると思いますが、第二十四回研究会「厦門・武夷山・建甌・建陽5日間」（九月二十一日～二十五日）が開催されます。八月十日（金）が締切りになっておりますので、参加ご希望の方は申込をお急ぎ下さい。詳しくは、お送りしましたパンフレットをご覧ください。

平成二十年度大会発表者の募集

平成二十年度大会の日程が決まり、平成二十年六月十四日（土）に主婦会館プラザエフ（東京・四ツ谷）で行なわれることとなりました。研究発表の部は、例年通り一人三十分（発表二十分質疑十分）を予定しておりますが、その発表者を募集しておりますので、ふろってご応募下さい。なお、ご応募される方は、学会事務局まで発表テーマをお知らせ下さい。

後記

* 前号の会報で、以下のような編集上の誤りがございました。ここに訂正させて頂きますとともに、深くお詫び申し上げます。

・倉澤行洋氏「回顧・茶の湯文化学会事始」

一頁下段十一行目

（誤）学会 ↓（正）学界

・大会（研究発表）

三頁中段三行目

（誤）岡山里香氏 ↓（正）岡山理香氏

・例会のご案内（東京例会）

十頁中段二行目

（誤）「薩摩茶入について」松村真希子氏

（正）「天目台 その赤と黒」西田宏子氏

・同（東海例会）

十頁下段五行目

（誤）「山田宗徧について」山田宗徧氏

（正）「山田宗徧について」山田宗徧氏

* 前号でもお知らせしましたが学会のホームページが更新されております。例会のご案内や研究会の開催などについても随時お知らせ致します。是非ホームページもご利用下さい。